

る。

ネンネコネンネコネンネココ

一番ミ同じ。

四、ユリカゴノユメニ

一番ミ同じ。

キイロイツキガ

談話

一月から二月にかけて、寒さの最もはげしい時で、雪の降る日も多いし、から風の吹くような日もある。従つてお休みする子は病氣をしてゐるからこぼかりは限らず、中には用心休みもこの頃は多い時、餘程出席率のいゝ組でも四五人は休んでゐる。殊に年少組では雪でも降つた日、遠方からはる／＼登園して来た子には、「まあ、よく来ましたね」ミいふ言葉でもかけずには居られない程だ。室内に籠る日が多いので、先生は次々ミ豫定を考へておかねばならない。女の子が有り合せの紙で、千代紙づくりを始めるのもこ

両手を左右から大きく上にあげお月様を作る。

カカルヨ

上にあげた両手を左右に軽く動かす。

ネンネコネンネコネンネココ

一番ミ同じ。

の頃。折角圖案を考へて、いろ／＼に塗るのに、粗末な紙では氣の毒ミ思つて、一帖ばかり改良半紙をおごれば大よろこびで、模様を工夫する。鉛筆でくる／＼ツミまいて、ちりめん紙なごにもする。男の子は飛行機をこぼす。これもせがまれてすぐ興へられるやうに、つゝみ紙、不用雜誌なごを用意しておきたい。かうして手技ミもあそびミもつかぬ事が行はれ談話の方から云へば、この保育案に掲げたものばかりでなく、外のを用意しておかねばならない。その外レコードをかける日もあり、話し合ひを面白く發展

させるにもいゝ時だ。雪の日なき、すつかり積つてしまつて、雪投げ雪だるまに興じられ、ばいゝが、降り盛る時にはそれも出来ないの、窓をあけて、子供ミ一緒に雪見をする。わが園でいふならば、窓をあけた眞向ひに大公孫樹がたつてゐる。つい先頃この木から落ちた銀杏を拾ひもし、家へのおみやげにもしたこころから大そう公孫樹ミは親しくなつてゐる。今は葉もすつかり落ちつくして、上枝下枝が大空にくつきりミ線をゑがいてゐるので、いゝ話題を生んでくれる。

雪の日にこのいてふに雀が澤山喜んで来た。

「あら、あんなに雀がしまつてゐる」

「ほんまだ、さつから来たんだらう」

雀は、枝々をさび歩いてゐる。

「雀もお話ししてゐるんでせう。今日は雪が降るので、お庭にだあれも居ないのねつて話してゐるかもしれない」

雀はバツミ一時にさび散つた。さうしたんだらうミ口々に云つて、行方をいつ迄もくながめてゐる。或は又

「先生、先生、あんな處に積木がある」

「橋の上に積つちやつた」

見なれてはゐるものゝ、いつもは自分達がその中にはいりつきりであるので、あらためて、かうして靜かに庭や木を見るのが珍らしいミ見える。昨日しまひ忘れた積木に雪が積つてゐるのも目に留まり、何でも話の種になる。私にしたミころが、家に居て降りつもる雪をながめてゐるミふのさけさは、追はれる忙しさで許されない。幼児ミ一緒にであればこそ雀のミまるのもゆつくり見てゐられる、ミひそかに思つたりした。

この間も四人ばかり靴下をすつかり濡らしてしまつて、職員室の火鉢にかはかしに行つた。靴下はかけたあみの上にズラリミ並び、まわりからは、子供の足が火に向つて八本つき出でるで、これだけ見てもおかしくつてたまらないのに、四人が盛んに口角袍をさばして野球談をやつてゐる。りつばに座談會をやつてゐる。この側に居たくてたまらなかつたが、あミの子を放つておくわけにもゆかず、惜しいミ思ひ乍ら給仕さんに頼んで、保育室に来てしまつたが、爐邊のはなしのはつむいのも此の頃だ。設定された保育

案が度々臨時變更される時であらう。

第六週

笑ひ話

別にこの話に決めてあるわけでは無く、一口ばなしもか、おとし話もか云ふもので、野卑な意味の無いもの。可笑しくなつてくる氣持が大人も子供まで違ふので、笑ひ話と銘うつてこりあげても、一向可笑しがらないのもある。幼い時は意味よりも、音からはいることばに笑はされる。例へばキャンニヤアワンチウコケコッコのくり返しながら、先生が話の次ぎをつゞけようと思つても笑ひつゞけてゐるに云つたわけである。しかし又、先生の方から笑ひ話として、何か決めておかなければならない。年少組としては、よく子供が、川があつてね、こつちからくつが流れて来て、こつちからきうりが流れて来て、きうくつ、きうくつと云つたのよなき、いふ種類の話を、子供が話す。この位の短さで、子供がすっかり覚えてしまつて、すっかり子供自身が話し手になれば笑ひ話としての形になるわけである。

たぎんきやくかん

あるひ、たぎんが、やくかんの家へ行つて、表の戸を

「たぎんく」

こたゝきました。

するこやくかんは中で

「やかんましいい、やかんましいい」

と云ひました。(繪本童話第一輯)

これは子供からきいた話。この位の長さなら、内容も言葉も、年少組のほんぎ、その子もおぼえて自分の話として、發表が出来るであらう。

第七週

白墨のお家

東京の大震災に遇つた子供の話。實際にあつた話をもにしてつくられたと見える。こんな話もそろゝ事實談としてあつていゝと思ふ。

第九週

乃木大將

観 察

この頃小さい子供にもわかるように、繪ばなしで、いゝ木が出来てゐる。偉人物語のような話は、その人の偉さをならべたてゝもまだ感銘がうすいから、繪本によるのがいい。

第五週

雪(年長組第一週参照)

豆撒き

年中行事の観察は一般の自然観察よりも一そう生活的であり、郷土色を充分盛る事が出来、さながらの中に観察させ易いものであらう。豆撒きといふ社會観察では一つは豆を撒かせること、もう一つは豆撒きについての事物を注意することの二つである。代りがはるに豆を撒かせること(誘導保育参照)そしてお豆撒きがすんだらみんな集つて豆撒きについて話し乍ら今まいたお豆は斯ういふのだと注意してみせる。そしてお三寶、その他のものを行事について話し乍ら注意する。年の数だけお豆をたべるのを、何か子ぎも

い。一緒に讀んでかせる。そしてかういふ種類のは、幾日かくり返すのがいゝと思ふ。童話ならそうしないでもいいが、かういふ話はくり返しを必要とする。

與へていゝものがあつたら代りに與へ、數について具體的經驗をさせるのも年少組ならばよいであらう。又生のお豆を水に二三日つけて置き、芽の出るのをみせれば自然観察になつてくる。

第六週

常盤木の葉

多くの木の葉がない時、今も綠色してゐる木、雪が降つても枯れない葉を、少し暖い日、子ぎも達も外遊びの機會にみつけて注意する。これは、若し押し葉で去年の落葉樹の葉があつたなら、葉の性状について比較させてみるよゝい。手近な、松ミか樺ミかの葉である。そして比較したあとで何故丈夫なのかを子ぎも達にわかり易く話してやる。

木の幹